

-地域と大学を結ぶ- りえぞん No. 15

編集発行：武庫川女子大学 社会連携推進センター

目次

各国の外交官・公務員との日本語交流会を実施

【 日本語日本文学科 】1P

ボランティア団体が、ペットボトルキャップ回収による途上国へのワクチン支援について展示

【 英語グローバル学科 】1P

学生が企画・運営等に参画した「ひょうごユース eco フォーラム」(兵庫県主催)開催

【 教育学科 】2P

ボランティアサークル「MUKOnnect」が尼崎市での取り組みを発表

【 社会福祉学科 】2P

学生が小学生女子野球大会「N-PRIDE CUP” W”」にて学生救護ボランティアブースを開設

【 健康・スポーツ科学科 】3P

学生が芦屋市に寄贈したオリジナル絵本を使って読み聞かせ会を開催

【 生活環境学科 】4P

ワールドクリーンアップデーに学生たちが参加し、大学周辺でゴミ拾い

【 社会情報学科 】4P

学生が考案した和サラダ3品が商品化され、イトーヨーカ堂で発売中

【 食物栄養学科 】5P

トルコ・バフチェシヒル大学の相互訪問プログラムで、同大学の学生が丹波市で特産の丹波黒大豆の収穫を体験

【 食創造科学科 】6P

学生たちが学び舎を幻想的に投光、甲子園会館ライトアップを4年ぶりに公開

【 建築学部、建築学研究科 】6P

景観建築学専攻の大学院生が宝塚大橋の植栽デザイン案を市長にプレゼンテーション

【 建築学研究科 】7P

にしのみや市民祭り「ストリートピアノ」に4年生が出演

【 演奏学科 】8P

「音楽活用実習」受講生が『MuKoJoの音活 at S BRICK』を開催

【 応用音楽学科 】8P

能登半島地震 薬剤師の穴水町派遣チームでの活動報告

【 薬学部 】9P

2023年度も「健康相談ひろば」「まちの保健室」を開催

【 看護学科 】9P

高橋ゼミが冬の縁日をららぽーと甲子園で開催

【 経営学科 】10P

3 学科合同ゼミで尼崎市民まつりに参加

【 日本語日本文学科・教育学科・食物栄養学科 】10P

2 学科と西宮市立上ヶ原南小学校が協働して食育の授業実施

【 教育学科・食物栄養学科 】11P

本学と附属高校のカヌー部員が西宮市長を表敬訪問

【 カヌー部 】11P

コロワ甲子園リニューアルイベントで書道パフォーマンス

【 書道部 】12P

『高校生のためのバンジーエクササイズ体験会』を開催

【 スポーツセンター 】12P

「MUKO^{noa}（ムコノアプラス）」の取り組みが経済産業省の「リスクリングを通じたキャリアアップ支援事業」に採択

【 リカレント教育センター 】12P

本学の栄養科学研究所と西宮市保健所が「親子料理・食育教室」を開催

【 栄養科学研究所 】13P

本年度秋季展「近代のきものがみた夢」を開催

【 附属総合ミュージアム 】13P

新たに5つの包括連携協定を締結

・ 三重県多気町

【 学 院 】13P

・ 医療法人信和会明和病院

【 学 院 】14P

・ 香川県琴平町

【 学 院 】14P

・ 株式会社モンベル

【 学 院 】14P

・ グッドホールディングス株式会社

【 学 院 】15P

「第1回武庫女ビジネスコンテスト」を開催

【 学 院 】15P

本学とURグループ、阪神電気鉄道による武庫川団地の活性化プロジェクトが「2023年都市住宅学会 業績賞」を受賞

【 学 院 】16P

「武庫女ステーションキャンパス」が、第25回人間サイズのまちづくり賞（まちなみ建築部門 知事賞）を受賞

【 学 院 】16P

ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（女性リーダー育成型）キックオフシンポジウムを開催

【 学 院 】17P

日本一を達成した阪神タイガースの号外に「甲子園に一番近い大学」としてお祝い広告出稿

【 学 院 】18P

本学×日清シスコ 未来プロジェクトメンバーが、加藤産業グループ総合食品展示会で考案レシピの試食を提供

【 学 院 】18P

第4回「国際女性デーMUKOJO フォーラム」開催

【 学 院 】18P

学生が参加する「第6回武庫女スマイルフェス」をららぽーと甲子園で開催

【 学 院 】19P

-地域と大学を結ぶ- りえぞん No. 15

編集発行：武庫川女子大学 社会連携推進センター

充実する本学の地域連携活動

本学では、社会連携の活動が次第に数を増し、また継続的な活動も行われています。その中の際立った活動の概要を以下に紹介します。

【 日本語日本文学科 】 各国の外交官・公務員との日本語交流会を実施



日本語教員養成科目を履修している学生と本学公認ボランティア「Club IEO」の学生合わせて16人が、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、中米など21か国の若手外交官・公務員21人を迎えて、日本語による交流会を1月6日に本学で実施した。この21人は、2023年10月に来日し、2024年5月まで大阪府泉南郡の国際交流基金関西国際センターで日本語の研修を受けている。

交流会はグループに分かれてフリートークから開始。学生は平易な日本語と英語、筆談やジェスチャー、スマートフォンの画像検索など様々な手段を駆使しながらコミュニケーションを取った。出身地や、好きな音楽や食べ物、各国の若者言葉について紹介するなど、多様な話題で盛り上がった。

次に、すごろくや百人一首絵札での坊主めくり、ボードゲームなど日本の伝統的な遊びや書道を楽しんだ。書道では、日本語での自分の好きな言葉や自分の名前を調べ、本学学生のサポートを受けて毛筆でしたためていた。

最後にカンボジア出身のPhakdey（パクディ）さんが、代表として日本語と英語で本交流会について感謝のあいさつを行い、閉会となった。

本学科では、コロナ禍の時期を除いて、毎年、大阪府泉南郡の国際交流基金関西国際センターで日

本語研修を受講する各国外交官・公務員研修生を本学に迎え、日本語交流会を開催している。



【 英語グローバル学科 】 ボランティア団体が、ペットボトルキャップ回収による途上国へのワクチン支援について展示



本学科のボランティア団体 Mukogawa English Community (MEC) の学生が、西宮市の商業施設「コロワ甲子園」（西宮市甲子園高潮町）で、「ペットボトルキャップ集めませんかー君もヒーローの1人に」という題の展示を1月9日から16日まで行った。

展示では、ペットボトルのキャップの回収が、途上国の子供たちへのワクチン支援につながることを説明。多くの人がふだんゴミとして捨てているペットボトルのキャップを回収して、指定の業者へ引き渡すことで樹脂として再生され、その売却

利益の一部が、ポリオワクチンを途上国に贈る NPO 法人に寄付され、子どもたちの命を救うことにつながる。

今回の展示では、学年や学科の枠を超えて学生が協力し、伊藤美咲さん(英語グローバル学科 1 年)、山村さつきさん(同学科 4 年)、山中里沙さん(同学科 1 年)、森田理香さん(社会情報学科 2 年)が携わった。伊藤美咲さんは「ペットボトルキャップがポリオワクチンになり、子どもの命を救えることを知って欲しいと思います」、山村さつきさんは「今回の展示がきっかけとなって、学内でも同様の取り組みをする弾みにしたいです」とのこと。



【 教育学科 】

学生が企画・運営等に参画した「ひょうごユース eco フォーラム」(兵庫県主催)開催



環境問題の解決に取り組む学生団体や企業、NPO 法人などが日頃の活動内容を報告し、問題意識を共有する「第 5 回ひょうごユース eco フォーラム」(兵庫県主催)が 2023 年 12 月 23 日、神戸市のデザイン・クリエイティブセンターで開催された。44 団体約 160 人が参加し、口頭・ポスター発表や

グループディスカッション等で交流した。

このフォーラムには若者世代による環境保全・創造活動の活性化を図るために、県内の大学生・大学院生の計 5 人が学生企画委員として企画・運営等に参画した。本学からは酒井ゼミの 3 年大島梨花さん、織田沙也加さん、森島奈穂さんが参画し、行政の担当者や他大学の学生とともに 8 月から企画を進めてきた。

当日、本学の 3 人がフォーラムの総合司会を務めた。また、酒井ゼミの他の学生たちも参加し、かつて鳴尾地区で栽培がさかんだった鳴尾いちごの魅力を地元の子供達に伝える活動の成果をポスターで発表した。

織田沙也加さんは「学生企画委員として参画することにより、SDG s について深く考える機会を得て、大勢の前で総合司会をする経験もできました。将来、小学校教員を目指す自分にとって、よい学びになりました」と話していた。



【 社会福祉学科 】

ボランティアサークル「MUKOconnect」が尼崎市での取り組みを発表



社会福祉学科の学生が中心となって活動するボランティアグループ「MUKOconnect」(2023 年 2 月発

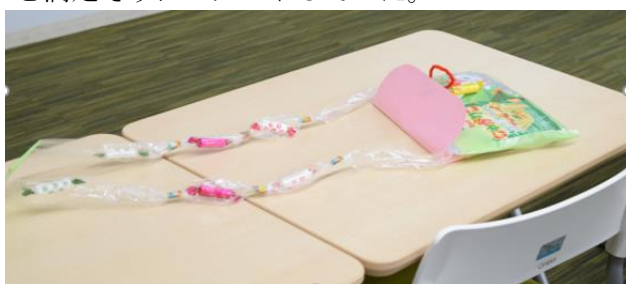
足)が尼崎市の「支えあいを育む人づくり支援事業」の一環で「防災お菓子ポシェットづくり」に取り組んだ。12月21日に行った成果発表会では尼崎市の職員や地域の保護司らが聴講し、学生たちの取り組みをたたえた。

「MUKOnnect」は、同学科を中心に看護、心理、教育、英語グローバル、社会情報の各学科学生ら計66人で活動しており、ボランティアが必要な現場ごとにメンバーの中から参加者を募り、様々なサポートを実施している。

「防災お菓子ポシェット」は、一般社団法人「おいしい防災塾」が考案したお菓子を詰め込んで肩から掛けられるビニール制の手作りポシェット。非常時にはおよそ一日分の非常食になり、平時には子どもたちに楽しみながら防災について考えてもらう端緒になる。

参加学生らは11月にポシェットづくりの講座を受講。「学生アンバサダー」として認定を受けたうえで、12月2日に尼崎市内で子どもたちにポシェットづくり講座を開催。学生たちは子どもたちが自分でお菓子を選び、ビニールに詰め込んでポシェット形に整えるのをサポート。付き添った保護者とも交流しながら楽しく防災について考えた。

発表会では学生たちは「子どもたちが楽しかった！と言ってくれた」、「会話しながら楽しく作れた」、「大変だったけれど達成感が得られた」などと満足そうにコメントしていた。



【健康・スポーツ科学科】

学生が小学生女子野球大会「N-PRIDE CUP” W”」にて学生救護ボランティアブースを開設



2月3、4日に西宮市浜甲子園運動公園内野球場等で行われたN-PRIDE CUP” W”に中堀ゼミの学生が救護ボランティアとして大会をサポートした。

この大会は「野球の聖地 西宮」を掲げる西宮市スポーツ少年団が実施する女子学童の野球大会で、本学も協賛している。第6回となる今回は小学生女子野球選手約400人(20チーム)が参加し、5球場で連日ハイレベルな熱戦が繰り広げられた。

中堀ゼミは本部横に救護ブースを設置し、参加した学生は会場を巡回、傷病者への応急処置対応などを行った。これらの活動は授業で学んだスポーツ傷害の処置法や固定法の実践の場として、知識や技術の学びの重要性や選手の健康を管理する責任を実感する貴重な機会となった。

ブースの一角にはスポーツ用ナプキンや吸水ショーツなどの最新生理用品の展示を行い、参加した小学生や保護者にサンプルを見てもらい、女性アスリートとしての月経対応についても考える機会を提供した。中堀准教授は「本学科では今後も女性アスリートをサポートし、学生たちが経験を通じて学び成長できる場を提供していきます」と、話していた。



【 生活環境学科 】

学生が芦屋市に寄贈したオリジナル絵本を使って読み聞かせ会を開催



授業で学生が手がけ、芦屋市に寄贈した絵本「さくらまちとミライ」を使った読み聞かせ会を1月30日、芦屋市立精道こども園で開催した。

「さくらまちとミライ」は生活環境学科3年の笹井愛未さんと大道柚香さんが原画からストーリーまで手作りしたオリジナル絵本で、芦屋市に住む「ミライ君」が5人の桜の妖精と出会い、芦屋市の魅力を発見する物語。

昨年7月にワークショップで披露し、資金を集めてハードカバーに製本した50冊のうち14冊を11月、芦屋市に寄贈した。精道こども園にも配架され、今回の読み聞かせが実現した。

読み聞かせは、同園の5歳児49人を対象に笹井さんと大道さんが行い、子どもたちは目を輝かせて聞き入っていた。

「大人になった時、どんなみらいのまちに住みたい？」と尋ねるシーンでは多くの園児が手を挙げ、「みんなが笑顔のまち」や「桜が咲く平和なまち」などと発言。

読み聞かせに続き、絵本のキャラクターをモチーフに、「自分だけの妖精メダルを作ろう」、「楽しくお絵かきをしよう〜大人になった時どんなまちに住みたい？〜」と題し、ワークショップを実施。

園児たちは楽しく過ごしたお礼に学生たちに感謝状と歌をプレゼントし、「またきてね」「絵本もって好きになったよ」などと声をかけていた。



【 社会情報学科 】

ワールドクリーンアップデーに学生たちが参加し、大学周辺でゴミ拾い



世界各地で一斉にゴミ拾いを行う「ワールドクリーンアップデー」の9月16日、井上ゼミが中央キャンパスとららぽーと甲子園周辺でゴミ拾いを行った。

ワールドクリーンアップデーは2008年にエストニアの若者たちが始め、現在、世界の190の国と地域に広がっている活動。日本でも今年、同日に約500か所でゴミ拾いが行われた。

本学では井上ゼミの学生と学科の有志、学友会メンバー、そして教職員らがこの活動に初めて参加した。

午前中は井上ゼミ生と学科の有志16人、地域在住の参加者24人の合計40人がららぽーと甲子園周辺でプロギングというジョギングしながらゴミ拾いをするというスウェーデン発祥の新しい環境美化スポーツを行った。中には児童や中学生もいて、懸命にゴミを探して拾っていた。

午後は学友会メンバーと本学科の有志11人が中央キャンパスから鳴尾・武庫川女子大前駅までの43号線沿いに歩き、植え込みの中に捨てられた空き缶やペットボトル、道端に落ちた飴の包み紙などを回収した。

この日、集めたゴミの量は可燃ゴミ12.5kg、不燃ゴミ4.2kgになった。

学生たちは「ビールの空き缶やたばこの吸い殻が目立つので学生が捨てたものではないと思うけれど、見えないところに結構ゴミが多くて驚いた」と言い、植え込みの葉や枝をかき分けて真剣な表

情でゴミを拾っていた。ゼミ生の布明子さんは「コロナの間、思うように外に出て活動できなかったのも、このような意義ある活動ができてうれしい」と話していた。



【 食物栄養学科 】

学生が考案した和サラダ 3 品が商品化され、イトーヨーカ堂で発売中



本学とイトーヨーカドーによる「和サラダレシピコンテスト」(後援・協賛: 株式会社日本アクセス、旭松食品株式会社) の入賞作 3 品が商品化され、10 月末から関西のイトーヨーカドー 7 店舗で販売されている。

このコンテストは、本学卒業生の旭松食品社員の発案で始まり今年で 2 年目。今年のテーマは「和サラダ」で「こうや豆腐」か「その他の乾物」を食材にするのが条件。グランプリに食物栄養学科 3 年小泉夏子さん、こうや豆腐賞に同 3 年秦野紗都さん、乾物賞に同 3 年石本絢菜さんが選ばれた。

小泉さんはレタスとキャベツのサラダにスパイシーなタコス風ソースを容器ごと振って混ぜる「タコス風 SHAKE 和サラダ」を考案。極小のこうや豆腐にソースが絡み、食べ応えのある仕上がり。秦野さんの「タブレ風さっぱり創作和サラダ」

は同じく極小のこうや豆腐を「クスクス」に見立て、大葉と枝豆で和の要素を加えた。石本さんの「ひじきの創作イタリアン和サラダ」はシート状のパルメザンチーズを載せて見た目も食感も意外性が楽しめる。

商品化に至るまで、食材や味、栄養価、容器やイラストまで複数の人が関わって試作と試食を繰り返した。小泉さんは「キャベツの切り方にもいろいろな提案をしてくれて、一つの商品には大変な過程があるのを知りました」、石本さんは「赤や紫の野菜を加えて彩りを改善したり、汁気がたまらない容器を選んだり。パックに入った完成形を見た時はこれが店に並ぶんだ、と実感しました」。秦野さんは発売後、売り場の様子が気になってイトーヨーカドー甲子園店を朝夕のぞいたそう。「お客さんが商品をかごに入れるのを見てうれしかった。2 度目はさらに売れていました」と笑顔で報告。

管理栄養士の資格取得後、「公務員」「企業で商品開発」「病院や企業で栄養指導」等、それぞれの夢を描く 3 人。小泉さんは「商品開発を実体験できたことで自信ができました」、石本さんは「企業が評価してくれて、新しい意見を聞く楽しさを知りました」、秦野さんは「将来、企業や保健所などで献立を考える際、この経験を活かします」と話している。



【 食創造科学科 】

トルコ・バフチェシヒル大学の相互訪問プログラムで、同大学の学生が丹波市で特産の丹波黒大豆の収穫を体験



食創造科学科は、グローバル化が進む食産業において国際的に活躍できる人材の育成を目的に、本学と交流協定を結ぶバフチェシヒル大学(以下「バ大学」)との相互訪問プログラムを11月にスタートさせた。

バ大学からは、食文化や料理を学ぶ学生9人が11月27日から本学を訪問し、12月9日までの日程で本学での講義(日本社会や日本の食文化、伝統食や食産業の状況など)、料理実習への参加、灘の酒造会社などの食産業や食の生産現場の見学、日本の伝統芸能の鑑賞などのプログラムを本学学生と交流を深めながら実施。12月2日には、日本の食産業に触れる「第一次産業体験」として丹波市を訪れ、特産品である丹波黒大豆の収穫を体験。

丹波市で収穫体験は、バ大学の学生から事前に、「日本の第一次産業の現場を見学したい」という要望があり、本学と包括連携協定を締結している丹波市の協力を得て、相互訪問プログラムの一つとして実施。バ大学の学生は本学科の学生、引率の教員らと一緒に丹波市氷上町の農家、泉好幸さんの農場を訪れ、泉さんから指導を受けながら、丹波黒大豆の収穫体験や煮豆を試食。

参加した学生たちは、「黒豆の栽培や収穫の仕方を学ぶことができ、美しい自然に囲まれた道もあり、とても楽しく勉強になりました。思い出と情報でいっぱい楽しい旅でした」、「黒豆の味はとてもユニークで、本当においしい」、「黒大豆の甘味は、好みの味。トルコには、甘い豆などない。黒大豆の甘味は唯一無二です」、「トルコの定番料理にRice Puddingという人気の料理がある。この料理の食材は、米、ミルク、砂糖、そしてシナモンであるが、砂糖の代わりに黒大豆を使うと、面白いかもしれないと思った」などと話していた。

学生を引率した食創造科学科の教員は「この農業体験では日本の農業地帯を訪れ、日本の農業生産の風景を見ることができたという点を積極的に評価した意見が多いように思われます」と話していた。



【 建築学部、建築学研究科 】

学生たちが学び舎を幻想的に投光、甲子園会館ライトアップを4年ぶりに公開



コロナ禍で公開を見合わせていた甲子園会館のライトアップが11月25日、上甲子園キャンパスで4年ぶりに公開され、約400人が訪れた。学生たちが学びの一環として取り組み、建物が最も美しく見える投光器の当て方を工夫した手作りのライトアップ。冬の清涼な空気の中、浮かび上がる幻想的な甲子園会館に、来場者からは感嘆の声。

今年、ライトアップに取り組んだのは建築学部建築学科、景観建築学科、大学院建築学研究科の約100人の学生。いずれも演習やフィールドワークの授業の中で準備期間は約1か月。

甲子園会館は窓が小さく、壁面にボーダータイルやレリーフなど様々な装飾が施されているのが特徴。これらの凹凸を魅力的に演出するため、投光器125基を置いて、1階から3階までの外壁を360度照射。2本の塔はテラスや窓際から複層的に光を当て、その威容を際立たせた。正面の小窓と西ホールのガラス面には、学生が作ったサンタクロースのアニメーションを投影し、一足早いクリスマスモードに。

投光器はカバーで覆い、光源に気を取られないよう、細かな配慮も。以前は「クリスマスツリー」に見立てて華やかに電飾した 2 本のヒマラヤスギは、下部のみライン状で電飾する控えめなライトアップで、主役の甲子園会館を引き立てた。

午後 5 時に開場すると、事前予約した様々な世代の人が見学コースへ。大阪市内から夫婦で来た男性は「初めて来ましたが歴史的建造物を生きた教材として学ぶ環境が素晴らしい。今度は日中の見学にも来てみたいですね」と話していた。

岡崎学部長は「日本の空間はひさしが長く、その下に深い影ができるのが特徴です。学生たちは影を美しく作るため、試行錯誤して最適な投光器の 0 位置を探り、今日に臨みました。太陽光は上から照らすけれど、下から光を当てることで現れる甲子園会館の夜の表情の奥深さを楽しんでもらいたい」と話していた。



【 建築学研究科 】

景観建築学専攻の大学院生が宝塚大橋の植栽デザイン案を市長にプレゼンテーション



武庫川にかかる宝塚大橋のリニューアルにあたり、大学院景観建築学専攻の院生 7 人が歩道空間の植栽デザインを考え、20 日、宝塚市役所で山崎晴恵市長らにデザイン案をプレゼンテーションした。

宝塚市と本学が締結する包括連携協定に基づき、整備後の花壇を管理する宝塚市が景観建築学専攻に対し、植栽デザインの提案を依頼。修士課程 2 年生 7 人が「建築実務インターンシップⅡ」の授業の一環として取り組んだ。

新たな歩道空間を備えた宝塚大橋は 2023 年度中に完成予定。デザイン案を考えるにあたり、学生たちはまず、宝塚大橋を中心にフィールドワークを実施。

「西日の照り返しが強い」「地域住民や観光客が利用し、車や自転車の往来が多い」など地域の特性を踏まえたうえで、「宝塚の玄関口であり、宝塚大劇場に近い華やかさ」を表現しようと、宝塚歌劇団の 5 つの組のカラーを花や葉の色で取り入れた。

また、植栽帯の土壌の厚さが原案の 15 センチの場合と 25 センチに変更した場合とを比較。土壌の厚さを 10 センチ増やすことにより、植栽できる植物の種類が増え、バリエーション豊かな立体感のある空間構成が可能になる、としつつ、土壌が 15 センチの場合には乾燥に強くかつ、色彩豊かな植物を植栽し、できる限り華やかさを演出する案を示した。

プレゼンテーションでは複数のデザイン案を平面図や立面、模型、CG 動画で示した。開花時期の異なる植物を植えて、一年を通して花の色を楽しめるよう、工夫するとともに、水やりや刈込など手入れのしやすさにも配慮。また、ラベンダーやローズマリーなど香りを楽しめる花々を散りばめることで、見るだけでなく、五感で楽しめる植栽計画となっている。

プレゼンの最後にリニューアル後の宝塚大橋をイメージした CG 動画を上映。橋を渡るにつれて高揚感が増すドラマチックなデザイン案に、大きな拍手が送られた。

山崎市長は「この橋を渡った記憶が花の香りとともに残るのは素敵。手入れのことまで考えて提案してくれたことをうれしく思います。橋がガーデンプリッジとして末永く愛されることを願っています」。宮口実範・阪神北県民局長は「宝塚歌劇団の 5 つの色に着目し、植栽を立体的にとらえたのは素晴らしい。CG を見て、ここは橋じゃなくて公園だと思った。

地域のために思って提案してくれたので、できることを実現したい」と話している。

修士 2 年の片岡杏花さんは「市長をはじめ大勢の人の前でプレゼンをするのは初めてで緊張したが、好意的に受け止めてもらえてよかった。出来上がった橋を渡るのが楽しみです」と話していた。



【 演奏学科 】

にのみや市民祭り「ストリートピアノ」に 4 年生が出演



10 月 28 日に行われた「第 48 回にのみや市民祭り」にて、演奏学科の 4 年生がストリートピアノを演奏した。音楽学部オリジナル T シャツを着て、ピアノ連弾の演奏を披露。

市民祭りに訪れた多くのお客さまや、音楽学部演奏学科教授でピアノアンサンブル担当の宮下朋樹教授をはじめ、音楽学部の教員も熱い視線で見守る中、演奏とトークでイベントを盛り上げた。

参加した学生からは、「普段屋外で演奏する機会が少ないのですが、今回はご高齢の方から子どもたちまで、多くの方に演奏を聴いていただくことができ、とてもうれしかったです」、「温かい雰囲気の中で演奏を聴いてくださり、楽しく演奏することができまし

た。この度の貴重な経験に感謝し、これからも日々の練習に励みます！」とのコメント。



【 応用音楽学科 】

「音楽活用実習」受講生が『MuKoJo の音活 at S BRICK』を開催



12 月 10 日に本学科 4 年「音楽活用実習」受講生 5 人が兵庫県洲本市にある S BRICK（エスブリック）で音楽とマーケットが楽しめる地域活性化イベント『MuKoJo の音活 at S BRICK〜クリスマスがやってくる。〜』を開催した。

また、イベントには音楽専攻科修士 SPRINGS が出演し、クリスマスソング等を演奏した。



【 薬学部 】

能登半島地震 薬剤師の穴水町派遣チームでの活動報告



能登半島地震に係る兵庫県薬剤師会の医療支援派遣チームの一員として、薬学部の濱宏教授が1月26日から1月30日まで石川県穴水町に派遣された。

活動初日は、途中崩落した道路は緊急迂回路を回りながら、金沢駅からレンタカーで2時間半かけて、穴水町の医療支援活動チーム本部に移動し、そこでのチーム交代の引き継ぎから始まった。毎日支援本部から約50km離れた宿舎まで戻り、全国から集まって能登半島各地域に派遣されている薬剤師チームと情報交換を行いながら、活動した。

薬剤師の主な活動は、DMAT(災害派遣医療チーム)やJMAT(日本医師会災害医療チーム)による災害処方箋の調剤と避難所への薬の配送、服薬指導等の医薬品に関する仕事や、健康状態の悪い避難者のスクリーニング、受診勧告、避難所の衛生管理や消毒、CO2濃度の測定と換気指導等。また、DMATに同行して避難所を回り、抗がん剤治療中の避難者の発熱に関して意見を求められたり、搬送車内での注射薬調製にも携わったりした。

その他、保健師とも連携し、自宅にとどまっている被災者の打撲に対する市販医薬品での対応や、開業医や地域の薬局の開設情報を避難所と情報共有するなどの活動も行い、次のチームに引き継いだ。



医療支援活動チーム本部



引継ぎを行った日本全国からの薬剤師の医療支援派遣チーム

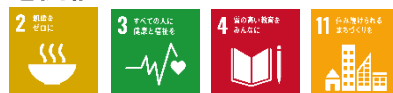


薬剤師チームがラウンドした避難所マップ



【 看護学科 】

2023年度も「健康相談ひろば」「まちの保健室」を開催



看護学科では、地域住民の健康保持増進及び日頃の健康づくりに関するご意見を聞く機会とするため、地域貢献活動及び教育活動の一環として「健康相談ひろば」や「まちの保健室」を開催している。

体調を気にしている人が診察を受けるきっかけになったり、子ども連れの方が保健師に子育てに関する相談をしたりと、開催日には毎回たくさんの住民の参加がある。心身の健康、子育て、生活習慣病、介護等の様々な不安や悩み、健康に関する相談に看護師、保健師、助産師の資格を持つ本学科の教員が応じている。

「健康相談ひろば」では、本学科の教員と教育学科の教員が子育て相談や乳幼児の身体測定を行った。相談者の利便性を考慮して「鳴尾・武庫川女子大前」駅から徒歩3分の「学校教育館」で開催。

「まちの保健室」は、「病院に行くほどでもないけど、気がかりなことがある。そんな時に気軽に立ち寄ってみませんか。」をキャッチフレーズに、全国各地の看護協会が様々な機関と提携して行っている事業。本学科は兵庫県看護協会と提携し、健康相談、健康指標の測定、心身の健康、生活習慣病、介護、子育て等の様々な不安や悩みの相談を受けている。甲子園駅から徒歩5分のららぽーと甲子園で開催。
※本学は「ららぽーと」を展開する三井不動産株式会社と包括連携協力協定を締結している。



【 経営学科 】

高橋ゼミが冬の縁日をららぽーと甲子園で開催



高橋ゼミが1月14日、ららぽーと甲子園*で1日限定の「NEON 縁日フェス」を開催。高橋ゼミの3年生が企画し、Z世代に人気のネオンをテーマに、ヨーヨーつり・スーパーボールすくい・ラッキーボール・わなげシューティング・クラッシュボーリング・ビンゴゲームをそろえ、ネオンライトが輝く「冬の縁日」を演出した。ペットボトルを活用した手作りのボーリングや、フォトスポットも用意した。

当日は午前10時のオープン直後から多くの親子連れが次々に訪れ、瞬く間に行列に。昼過ぎには準備していた景品やヨーヨーなどがなくなり、学生が購入に走ったり、追加で作ったり対応に追われた。ほとんどの参加者が1回券ではなく5回券を購入して、学生が準備したゲームを存分に楽しんでいた。想定以上の客数で、予定より2時間早くイベントを終了した。

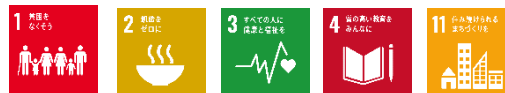
ゼミ教員である高橋教授は「休日の客層と学生達が考えたイベント内容がとてもマッチして、多くの方に楽しんでもらえてよかった。ゼミ生達は企画やオペレーションの難しさを学べたと思う」と話している。

※本学は「ららぽーと」を展開する三井不動産株式会社と包括連携協定を締結している。



【 日本語日本文学科・教育学科・食物栄養学科 】

3学科合同ゼミで尼崎市民まつりに参加



尼崎市で子ども食堂のサポートに取り組んでいる3学科合同ゼミの学生らが10月1日、第52回尼崎市民まつりに参加した。

合同ゼミは、2018年から尼崎市元浜町の子ども食堂「モコモコ倶楽部」の運営をサポートしており、食堂を訪れる子どもたちに漢字と食物を組み合わせた「美味しい漢字教室」を開催している。今回の市民まつりでは「こどもひろば」に隣接して設けられた「学生ひろば」で子ども食堂での活動を紹介し、「美味しい漢字教室」を再現。約100組の親子が参加し、食に関する漢字クイズや塗り絵を楽しんだ。

子どもたちに多様な文化に興味を持ってもらおうと地元尼崎市内のスパイスカレー屋さんを取材して作成したオリジナルマップも配布。マップには、学生が考案し、子ども食堂でも人気のカレーのレシピも掲載されており、参加者が次々に手に取っていた。

指導する教育学科の吉井准教授は「多様なルーツを持つ人や子ども達がいることを知るきっかけになってほしい」と話している。



【 教育学科・食物栄養学科 】

2 学科と西宮市立上ヶ原南小学校が協働して食育の授業実施



3月5日、上ヶ原南小学校で学生と栄養教諭が5年生に食育の授業を実施した。

テーマは「よくかんで食べるための目標を作ろう」。管理栄養士を目指す食物栄養学科の3年生が、事前に教育学科の藤本准教授から学校での食育の進め方や指導案の作成方法等について指導を受け、栄養教諭と授業のリハーサルを行う中で、指導案を作成。

小学校では、事前学習として食物栄養学科小林研究室の4年生が卒業研究で作成した食育ポスターを掲示し、当日に向けて子どもたちの意識を高めた。当日は栄養教諭と学生が指導案に沿って授業を行い、授業終了時には児童らが「給食を味わって食べる」

「はじめは10回噛んで食べ、慣れてきたら15回噛んで食べるようにする」等、自分の行動目標を決めた。

授業を実施した食物栄養学科3年の江原佑香さんと内田晴菜さんは「小学校で授業を行うことは初めてでしたが、子どもの反応を見ながら授業を行うことはとても楽しく、また、栄養教諭の先生の授業を身近に見ることができ、大変勉強になりました。教育学科の先生、食物栄養学科の先生、栄養教諭の先生との意見交換や指導案作成等を体験でき、貴重な体験ができました。今後この体験を活かしていきたいと思います」と話している。



【 カヌー部 】

本学と附属高校のカヌー部員が西宮市長を表敬訪問



「第59回全日本学生カヌースプリント選手権大会」(インカレ)で大会12連覇を果たした本学カヌー部と国内大会での優勝のほか、世界大会に出場している附属高校カヌー部の部員が12月14日、石井市長を表敬訪問し、これまでの戦績や今後の抱負を報告した。

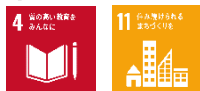
訪問者を代表して大学カヌー前主将の福田選手が「今年も武庫川女子大学と附属中学校・高等学校カヌー部の成績を報告できることを嬉しく思っています。インカレでは12連覇を達成することができたと共に、私が目標としていた全種目優勝を4年目にして達成することができました。それはチームのみんな、これまで指導してくださったコーチや先生方、保護者の方などみなさまのお陰です。私は社会人となり、カヌーを続けるのですが、この経験を生かしていきたいです」と述べた。

石井市長は「それぞれ素晴らしい成績の報告をありがとうございます。特に12連覇というプレッシャーもあったことと思いますが、それも撥ね退けて見事な成績を残されたことを素晴らしいことと思います。みなさんが勝ち進むことによって「武庫川」やこの地域のことを全国に知らしめていただけることが本当に嬉しいことだなと思います。これから先来年も再来年も武庫川の名前をぜひ全国に轟かせていただきたい。健闘を期待しています」と大会での活躍をたたえ、激励しました。



【 書道部 】

コロワ甲子園リニューアルイベントで書道パフォーマンス



書道部が9月15日、コロワ甲子園のリニューアルイベント「ALL KOSHIEEN FESTIVAL」で書道パフォーマンスを披露した。

日本語日本文学科2年の3人と社会情報学科2年の4人が参加。「コロワ甲子園」前の広場で「黎明」の文字と詩を伸び伸びと大書し、観覧者から大きな拍手を受けていた。



【 スポーツセンター 】

『高校生のためのバンジーエクササイズ体験会』を開催



本センターは8月22日から25日、「武庫女ステーションキャンパス」のウエルネス館で、『高校生のためのバンジーエクササイズ体験会』を開催した。

バンジーエクササイズは、天井から吊り下げたゴム製のバンドを使い、トランポリンのように跳ねたり跳んだり、ワークアウトしたり、逆さまになったりと無重力感覚で全身を機能的に鍛えることができるエクササイズ。

今回は高校生に向けて大学施設の見学も兼ねて開催し、計18人が参加。最初にミニトランポリンを使用したエクササイズで、アップを行いました。バンジーエクササイズでは、日常にはない浮遊感から歓声を上げる生徒も。皆、徐々にバンジーのバランス感覚をつかみ、音楽に合わせたエクササイズを行って1時間のイベントを終了した。



【 リカレント教育センター 】

「MUKOnoa+ (ムコノアプラス)」の取り組みが経済産業省の「リスキリングを通じたキャリアアップ支援事業」に採択



「リスキリングを通じたキャリアアップ支援事業」は、リスキリングと労働移動の円滑化を目指し、「キャリア相談対応」、「リスキリング提供」、「転職支援」を一体的に実施する体制の整備を目指すもの。

「MUKOnoa+」は、本学西宮北口キャンパスで2023年度からキャリアアップを目指すすべてのビジネスパーソンを対象に男女共学でスタート。リスキリングが国を挙げて推奨される中、「ビジネスパーソンのためのDX基礎講座」など、パソコンやDTP、Webなど、いまや就業に欠かせないデジタルスキルに特化した約150講座を開講している。「お父さんのための子育て講座」など、男性を支援する本学ならではの講座も開講。在職しながら転職を目指す人にも学びやすいよう、対面/オンライン、個人受講/クラス制など多様な学び方を用意している。

学び直しだけでなく、プロのキャリアカウンセラーによるキャリア相談から転職支援、求人紹介までワンストップでできるのが最大の魅力。りそな銀行、株式会社ワークアカデミーと本学が締結している三者協定に基づき優良企業を紹介しており、既卒者向けの合同企業説明会も開催。

(採択事業者は株式会社ワークアカデミー)



【 栄養科学研究所 】

本学の栄養科学研究所と西宮市保健所が「親子料理・食育教室」を開催



本研究所と西宮市保健所は、11月25日、12月9日の両日、西宮北口キャンパスで「親子料理・食育教室」（協力：広田地区社会福祉協議会）を開催。

本教室は、児童に体験型の食育講座を通じて食物や食事に興味を持ってもらい、その保護者に身体計測やバランスの良い食事をテーマにした講座を通じて、自身の健康を意識してもらうことが目的。

今回は、10月に子どもたちが収穫したさつまいもを使って、保護者とともにコロッケを調理し、試食した。その後、子どもたちは本学の学生による食育教室に参加。さつまいもの成長過程やさつまいもの料理、バランスのよい食事に至るまでをクイズ形式で楽しみながら学んだ。

保護者は、体脂肪率や骨格筋量、骨密度などの身体計測後、保健所による特定健診の現状やバランスのよい食事に関する講座を受講。身体と健康について学びを深めた。参加者は「体の状態を知ることができてよかった」、「検診に行こうと思いました」などと話していた。



【 附属総合ミュージアム 】

本年度秋季展「近代のきものがみた夢」を開催



本ミュージアムで2023年度秋季展「近代のきものがみた夢」を10月4日～12月6日に開催した。

本ミュージアムは近現代のきもの資料の豊富さで知られ、所蔵する登録民俗文化財「近代衣生活資料」9092点のうち2519点をきものが占めている。大半は市井の人から寄贈されたもので、それぞれの素材や

意匠がその時代と人々の暮らしを知る手がかりとなっている。

今回展示するのは明治後期から昭和戦前期のきものや帯約30点。染織品制作の技術革新と西欧文化の影響が反映され、主に都市部に受け入れられたモダンで斬新なきものにフォーカスした。

「技術とモダンの交錯」「写実への傾倒」「近世絵画の応用」など、6つのテーマ別に展示した。深紅の薔薇が刺繍と染めで描かれた名古屋帯はまるで油絵のよう。写実的なえんどう豆が描き込まれた長じゅばん、西洋のリボンを大胆にデザインした衿長着、淡いピンク色の衿長着には、ペイズリー風の図柄が全面に描かれている。人々の暮らしに溶け込んだ浴衣も4点展示。台形や三角、アルファベットなどを大胆にちりばめた浴衣や柳の枝をモチーフにした浴衣には、注染という型染技法が使われている。

横川館長は「着物を画面に見立てて西洋的なものを描き出し、デザインの可能性を探っているのが興味深い。当時は万博が盛んな時代で、世界中の文化に触れる機会があった。表現のモダンさと世界に目を拓いた当時のグローバリゼーションの気分を感じ取ってほしい」と話している。



【 学院 】

新たに5つの包括連携協定を締結

・三重県多気町



多気町へは2021年に経営学部の学生が実践学習で訪問。以来、町役場や地元の方々の支援を得ながら、ふるさと納税返礼品や観光振興策を検討、学

生視点からの提案や町の魅力を阪神間で発信するなどの活動に取り組んでいる。



・医療法人信和会明和病院



山中理事長は「病院は地域医療に貢献することが使命であり、医療においては実学(実践的学び)が重要です。看護学部に加え、薬学部の学生の実習の場として、武庫川学院の教育の一端に携われることを光栄に思います。これまでも長く密接な関係のある両者ですが、今後ますます連携を進めていきます」と話し、瀬口学長は「本学は看護学部をはじめ、附属中学・高校の校医や学生の健康診断等で日ごろからお世話になっています。薬学部の実習受け入れも決まり、今後さらに教育・研究・学生や教職員の交流により新たな成果が生まれることを期待しています」と述べた。



・香川県琴平町



琴平町とは2022年5月に経営学部の実践学習での観光振興について初会合を持ち、同年9月に「琴平町観光立案プロジェクト」

を立ち上げた。学生たちによるふるさと納税返礼品企画や観光振興面での協働に今後取り組んでいく。



・株式会社モンベル



モンベルはアウトドア活動を通して環境保全意識や防災・災害対応力の向上などを目指す「モンベル7つのミッション」を掲げており、能登半島地震でもいち早く「アウトドア義援隊」を結成して被災地支援に乗り出している。また、本学は、女子大初となる環境共生学部を2025年4月開設予定。新学部ではフィールドワークを重視し、環境マインドを持って持続可能な未来を創造する人材の育成を目指している。

「環境との共生」というミッションを共有する両者が緊密に連携し、アウトドアでのフィールドワークや実践活動を通じて様々な課題解決と地域の活性化、人材育成に寄与することを目的に協定締結に至った。環境共生学部は文部科学省の「大学・高専機能強化支援事業」に選定されている。

締結式で辰野会長は「環境や健康などの分野で私たちの7つのミッションを実践していただくことを期待しています。机上の学びにとどまらず、フィールドに出て自然を肌で感じ、生き抜く知恵や力を学んでほしい」と語った。

瀬口学長は「阪神淡路大震災をはじめ、今回の能登半島地震でもいち早く支援の手を差し伸べられていることに感銘を受けています。本学には12学

部 20 学科の幅広い学部学科があり、7つのミッションと様々につながりが持てると確信しています」と話した。



・グッドホールディングス株式会社



西宮市で環境総合サービスを展開するグッドホールディングス株式会社と包括連携協定を締結。本学の 13 番目の学部となる環境共生学部(2025 年 4 月設置構想中)を機に、ともに持続可能な未来の創造をめざし、SDGs の推進や地域振興、人材育成に力を合わせようと、連携協定締結に至ったもの。新学部開設後は施設見学や社会連携プロジェクトで協力を得る予定。

瀬口和義学長が「新しい学部では、環境問題を総合科学的な視野でリードする人材を育成したいと考えています。新学部に限らず、食物栄養科学部や社会情報学部、経営学部など環境問題に資する学部が多数あります。ぜひ本学の幅広い知見と研究成果を活用していただき、互いに発展していきたい」と話した。

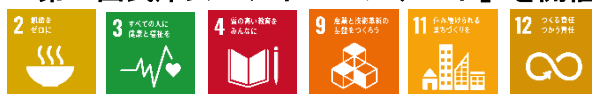
赤澤健一社長は「私たちは廃棄物のリサイクルをはじめ、環境や社会のニーズに多岐に渡りこたえてきました。連携協定を通して環境や社会課題に知識と実践力ある学生が育ち、社会で活躍することを願います。環境問題は多岐に渡る学際的なテーマであり、暮らしや社会に広く関わります。一面的な切り口では合意形成が難しいのも事実です。

一方で、社会の持続可能性と産業の成長可能性がトレードオフではなく、同じベクトルで解決で

きるよう、学生さんたちには期待したい」と語った。



「第 1 回武庫女ビジネスコンテスト」を開催



「第 1 回武庫女ビジネスコンテスト」(教育研究社会連携推進室主催、女性活躍総合研究所共催)の表彰式が 11 日、公江記念館地下大講義室で開かれ、健康・スポーツ科学科 3 年の 6 人による提案「3 ヘルシー～肌をキレイに、心も体も綺麗に～」が最優秀賞を受賞した。このコンテストは起業マインドを持ち、MUKOJO Vision に掲げる「一生を描ききる女性力を。」を体現する学生を育成しようと 2021 年から 2 年間、続いた「武庫女ビジネスアイデアコンテスト」を、よりビジネスに特化して刷新したもの。今回のテーマは「SDGs を推進するビジネス」。

審査委員長の瀬口和義学長は「いずれも熱意が伝わる素晴らしい提案でした。学生時代に試行錯誤しながらこの熱意をさらに育ててほしい」と激励。審査のポイントとして、①説得力ある根拠が示されているか、②既存のビジネスと差別化できているか、③ビジネスとして可能性があるか、を挙げた。

審査は本学教員のほか、卒業生、起業家、阪神電気鉄道株式会社、株式会社みなと銀行が加わって行われ、最優秀賞、優秀賞のほか、阪神電気鉄道賞、みなと銀行賞、SOAR 賞を決定した。

最優秀賞の「3 ヘルシー～肌をキレイに、心も体も綺麗に～」は、美容と健康のため、学生が「食」に意識を向けるよう、学内でスムージーとスープを販売するビジネスを企画。原材料として農家から規格外の野菜や果物を仕入れることで、食品ロス解消にもつながる。受賞を記念して学生が壇上でプレゼンテーションを行った。

この企画に対し、瀬口学長は「ぜひ、学内で試行してほしい」と提案。コンテストを主催する教育研究社会連携推進室が予算 10 万円を補助する。

受賞について、健康・スポーツ科学科 3 年の工藤堇さんは「自分たちから大学に関わる良い機会と思い、ゼミのみんなと参加しました。私たちのわがままなプランを認めてもらってうれしい」。思いがけず、学内試行という新たな課題を与えられたことについて同 3 年、石野智深さんは「難しいと思うけれど、みんなで協力してできるところまで頑張りたい」と話していた。



本学とURグループ、阪神電気鉄道による武庫川団地の活性化プロジェクトが「2023 年都市住宅学会 業績賞」を受賞



本学とURグループ（独立行政法人都市再生機構西日本支社、日本総合住生活株式会社、株式会社URコミュニティ）、阪神電気鉄道株式会社による産学連携の武庫川団地活性化のプロジェクトが、「2023 年都市住宅学会 業績賞」（主催：公益社団法人都市住宅学会）を受賞した。

プロジェクトは、長く地域の足として親しまれた阪神武庫川線の引退車両「赤胴車」を阪神電鉄がUR武庫川団地内に設置したことがきっかけとなり、エリアの賑わいづくりに取り組んだ。今回の受賞では、産直ショップなどが出店した「赤胴車マルシェ」やランプシェードを制作するワークショップ「赤胴車灯工房」、制作したランプシェードで広場を照らす「ナイトピクニック」、「陶芸体験むこだん焼き」、「健康相談会」などの赤胴車を用いた多くのコミュニティ活動が評価された。

今後もURグループ、阪神電鉄との産学連携を活

かし「赤胴車」を地域のコミュニティ拠点として活用しながら、地域の更なる活性化の取り組みを進める予定。



「武庫女ステーションキャンパス」が、第 25 回人間サイズのまちづくり賞（まちなみ建築部門 知事賞）を受賞



阪神電鉄「鳴尾・武庫川女子大前」駅直近の高架下にある「武庫女ステーションキャンパス」が、令和 5 年度/第 25 回人間サイズのまちづくり賞（まちなみ建築部門 知事賞）を受賞し、11 月 25 日に兵庫県公館で、生活環境学部の三好学部長と岩田教授らが表彰状を受けた。

この賞は、兵庫県が「まちづくり基本条例」に基づき「人間サイズのまちづくり賞」として 1999 年度に創設された。成熟社会にふさわしい、まちづくりに寄与する優れた建築物や、まちづくり活動に顕著な功績のあった団体等が毎年表彰されているもの。

「武庫女ステーションキャンパス」は、鉄道会社と大学が連携し、駅高架下に地域拠点機能を持つ大学キャンパスを整備した新規性や、地域の人々が立ち寄りやすい開放的な外観、「鳴尾エリアマネジメント連絡会」によるまちづくりに取り組んでいることなどから評価された。

表彰式には、事業主として学院（大河原理事長代理 重岡譲参与）、企画・設計者として三好学部長と岩田教授、実施設計・監理を担当した PPI 計画・設計研究所、施工会社として（株）ハンシン建設が出席。

表彰式の「知事賞の紹介」では、三好学部長が「武庫女ステーションキャンパス」のプロジェクトの意義や事業スキーム、建築デザイン面の要点などにつ

いて説明した。

※2022年には、グッドデザイン賞も受賞



ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ (女性リーダー育成型) キックオフシンポジウムを開催



本学が令和5年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(女性リーダー育成型)」取組機関として選定されたのを受け2月16日、中央キャンパスメディアホールでキックオフシンポジウムを開催。

私学で唯一また女子大で唯一選定された点に鑑み、「女子大学における次世代女性リーダーの育成」をテーマに基調講演とパネルディスカッションを実施。

第一部では、科学技術振興機構プログラム主管の山村康子氏と本学女性活躍総合研究所の高橋享子所長が基調講演。山村氏は「日本が目指す女性リーダー育成」と題し、いまだ性別役割分担意識が強く、女性リーダーが育ち難い状況を概観。大学教員では職階が上がるにつれ、女性が減っていく「水漏れパイプ現象」が起きているとし、女性リーダー育成を経営戦略として進めるうえで「アンコンシャスバイアス」がない仕組みを作ることが重要であると指摘。

高橋所長は学長をトップとする女性研究リーダー育成推進センターを組織することや、女性研究者上位職を取組機関の6年間で29%から40%にするなど目標値を示し、「本プログラムで育成された多くの人材が他大学や企業などで男性研究者とともに活動

し、リーダーシップを発揮して活躍されることを期待します」と意欲を示した。

第二部のパネルディスカッションでは山村氏、高橋所長に加え、奈良女子大学の今岡春樹学長、西宮市を拠点に世界に展開する古野電気株式会社の古野幸男社長が登壇。経営学部の高橋千枝子教授がファシリテーターを務め、議論を交わした。

女性活躍が遅れている背景について、高橋所長は「意識改革と女性のキャリアデザイン、ライフプラン教育が重要」とし、今岡学長は「女性割合が低すぎるとマイノリティの立場に挑戦する女性が出てこない」とし、インド工科大学の例を挙げ「女性の比率を一定程度に引き上げる施策が有効」と指摘した。

古野社長は「最近女性役員を一定割合にするなど、産業界で従来の枠組みを変える動きがある。実際、女性の登用がないと会社のパワーが落ちるので、女性の活躍する仕組みづくりに各社とも取り組んでいる」と企業の変化を語った。

高橋千枝子教授が「学生の中にはリーダー回避の風潮がある」と問題提起すると、山村氏は「かけ離れたロールモデルではなく、身近な例を示すことが必要」、今岡学長は「リーダーとリーダーシップを分けて考える必要がある。目の前の課題に当事者意識を持ち、周りを巻き込んで推進するリーダーシップを持つ人が増えるための環境づくりが大事」、古野社長は「管理職を回避する男性が増加中。新卒女性でも意識の高い人には海外子会社への出張経験を積ませている」、高橋享子所長は「女性教員は増えても運営側は男性が多い。女性にマネジメントする体験の機会を与える必要がある。誰でもリーダーの資質があると思うので、グループワークでまとめ役をするなど、大学でこそ経験を積むべきだ」と呼び掛けた。



日本一を達成した阪神タイガースの号外に「甲子園に一番近い大学」としてお祝い広告出稿



阪神タイガースが優勝した11月5日、大阪駅前午後11時過ぎに毎日新聞の号外の配布が始まるや、待ちかねた阪神ファンが手を伸ばし、用意した2000部がわずか2分足らずで品切れに。

表面には、岡田監督が宙に舞う胸上げの写真と日本シリーズ全7戦の試合結果を、裏面では、前回日本一を達成した1985年以来の阪神の年度別成績推移や、今期と1985年当時の成績比較などを掲載。岡田監督が選手として活躍していたころの先発メンバー表には真弓、バース、掛布など懐かしい顔ぶれが並んだ。

本学は「甲子園球場に一番近い大学」として甲子園球場の1塁側アルプスに看板を掲出している。



本学×日清シスコ 未来プロジェクトメンバーが、加藤産業グループ総合食品展示会で考案レシピの試食を提供



本学×日清シスコ 未来プロジェクトメンバーは、総合食品卸売業の加藤産業(本社・西宮市)が9月13～15日の3日間、神戸国際展示場で開催した「第126回 2023 秋季加藤産業グループ総合食品展示会」で、日清シスコと加藤産業の自社商品を使用した考案レシピの試食を提供した。

未来プロジェクトメンバーは、日清シスコが今年9月に発売した「新ごはん」、「新パン」と、加藤産業の自社ブランドである「Kanpy (カンピー)」のジャムや味付け海苔を使用した新レシピを考案した。「新ごはん」は10レシピ、「新パン」は4レシピをそれぞれ提案し、この展示会では、「焼きおにぎり」と「フレ

ンチトースト」の試食を提供した。

「ごはん+ジャム」という難しい課題だった、みそにかんきつ類のジャムを混ぜた「味噌ジャム」を考案し、甘辛く香ばしい焼きおにぎりは、試食した人から大変好評。また、インタビューコーナーでは、未来プロジェクトのメンバーが、レシピ考案までの苦労を伝えていた。

新レシピの提供は、展示会会場で入場者が最初に通る「KATO 販促ストリート」で行われ、本学の産学連携の取り組みを、食品産業界に周知する貴重な機会になった。参加した未来プロジェクトメンバーは、多くの食品業界の情報を知り得たことで、大学では学べない体験ができたことを喜んでいて。

本学と日清シスコ株式会社は2022年10月、包括連携と協力に関する協定を締結し、食と健康、SDGsを通じた産学連携活動を実施し、相乗効果で主体性を持った人材の育成、共同研究による新商品の開発などに取り組んでいる。



第4回「国際女性デーMUKOJO フォーラム」開催



本フォーラムが女性活躍総合研究所主催で3月2日、中央キャンパス公江記念館大講義室で対面とオンラインで開催された。3月8日の国際女性デーにちなみ、学生や教職員、一般に向けて毎年行っているも

ので、今年は初めて兵庫県との共催で実施した。

兵庫県が女性活躍を促進しようと創設した「ひょうご・神戸女性活躍推進企業(ミモザ企業)認定制度」について、県の男女共同参画班長 長谷玲子さんが解説。ミモザ企業に認定されている株式会社神戸製鋼所の人事労政部・担当部長 森下薫さんが「ミモザ企業における女性活躍に向けた取組—神戸製鋼所の事例—」と題して、基調講演。森下さんは、神戸製鋼所が取り組むD&I(ダイバーシティ&インクルージョン)を推進するための様々な取り組みを紹介。女性活躍だけでなく、多様な人が個性や実力を発揮して企業価値を高めるためには、組織を超えたコミュニケーションの活性化が土台になると語った。

第2部では、「つかみたい未来—わたし(たち)のキャリアデザイナー—」をテーマに本学学生に募集したエッセイや短歌の中から、入賞者3人が登壇。スピーチで最終審査に臨み、最優秀賞に英語文化学科3年の松山由佳さんが選ばれた。

受賞者と作品タイトルは次のとおり。

〈エッセイ部門〉

大学建築学部建築学科1年 堤祐子さん

(優秀賞) 「ボランティアと男女平等」

短期大学部日本語文化学科2年 後藤モナさん

(優秀賞) 「わたしのやりたいこと」

〈短歌部門〉

大学文学部英語文化学科3年 松山由佳さん

(最優秀賞) 「企業理念に迷い込む 脱出キーは自分軸 時代は今やオーダーメイド」



学生が参加する「第6回武庫女スマイルフェス」をららぽーと甲子園で開催



「第6回武庫女スマイルフェス」が2月17日(土)、18日(日)、ららぽーと甲子園で開催。「武庫女スマイルフェス」は武庫川女子大学の取り組みを地域の人に知ってもらおうと、三井ショッピングパーク「ららぽーと甲子園」と合同で毎年行っており、今年で6回目。ゼミやボランティア団体など16団体が参加し、ショッピングモール1、2階でパネル展示やワークショップを行っている。

17日は、健康・スポーツ科学科准教授 中堀千香子ゼミが「ハロー！フェムテック」と題し、月経カップや吸水ショーツのサンプル体験、自分に合う生理用品を探すワークショップを開催したり、社会情報学科教授 藤本憲一ゼミが、西宮市のコーヒーショップが手掛けるクラフトビール「Heal&Doul(ヒルソル)ビール」の地域に密着した取り組みを展示で紹介している。

17日、18日両日行われるイベントでは、日本語日本文学科講師 工藤彰ゼミが、近代文学を現代的に再解釈し映像作品にした「re:creation」や、社会情報学科准教授 平井拓己ゼミの兵庫県産のドライフルーツを使った「フルーツキャンドルクラフト」づくりなどを実施。また、玄米の普及を通して国連WFPの活動を推進する「ブラウンライスボランティア」や、学生広報スタッフ「La chouette*」の「学生目線でみる武庫女の魅力！」など学生ボランティアによる展示も例年通り参加している。

18日は、薬学部の化粧品科学研究室の学生が、ゼミで開発したハンドクリームを使ってハンドマッサージを実施する「ハンドサロン」や、「健康アロマプロジェクト」として、アロマルームスプレーを作るワークショップなど、来場者の参加型イベントが複数開催された。

各ブースには学生が立ち、お客さまにワークショップなどのイベントへの参加を案内。買い物に訪れた親子連れが学生の声がけに立ち止まり、熱心に展示を見ていた。

※本学は「ららぽーと」を展開する三井不動産株式会社と包括連携協力協定を締結している。



◆◆◆
本稿の写真はすべて本学 HP 掲載済のものです。

ご意見・ご質問等は、本館 5 階 社会連携推進課まで
担当：安藤 (6212)

E-mail: shakai@mukogawa-u.ac.jp